慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	テキストとイマージュ：散文ランスロのDouloureuse Gardeのエピソードより
Sub Title	Le Texte et l'Image : Essai sur la représentation de Lancelot
Author	後平, 澪子(Gohira, Mioko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.244(113)- 255(102)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0255

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

テキストとイマージュ
—散文ランスロのDouloureuse Gardeのエピソードより—

後　平　澪　子

中世の写本がどのようにして製作されたかは，いまだ明らかでない部分が多く残っている。テキストの作成，挿絵，製本と細かい分業態勢が敷かれていたと推測されるが，実際これをどのように取りまとめて1冊の本を完成させていたのだろうか。挿絵はテキストにどのくらい忠実なのであろうか。このように細かい点に関しては，様々な疑問が浮かんでくる。ここでは，散文「ランスロ」の中のDouloureuse Gardeのエピソードを取り上げ，テキストと挿絵の関係を視覚的な側面から検討してみようと思う。このエピソードを材料としたのは，色彩が象徴的な意味を帯びて扱われているためである。テキストで強調されているこの象徴性がイマージュではどのような扱いを受けているか以下で検討する。

1．テキスト

Douloureuse Gardeは，ランスロの生涯に深い関係のある場所である。自己の出生の秘密，自分の名前を初めて知ったのも，自分が将来葬られる墓を見つけたのも，後にギュニエヴル王妃と隠れ住んだのもDouloureuse Gardeにおいてであった。そして実際，ランスロはDouloureuse Gardeで親友ギャルオーの隣に葬られる。しかし，ここで重要となるのは，ランスロが騎士になって初めて1人で征服した城がDouloureuse Gardeだということである。

騎士に叙任されてからまもなくノオーの奥方の救出に赴くが，これはクーと2人で行った冒険であるから，除外してよいだろう。

Douloureuse Garde の冒険は一見謎めいて複雑そうだが，次の２つの意味が浮かびあがってくる。まず１つは，城に立て篭もっていた悪の追放。これは城を取り巻く魔力がすべて消え去ったあと，Douloureuse Garde が Joyeuse Garde と呼ばれることからも明らかだ。Douloureuse Garde にやって来た騎士のうち，死んだり虜にならず，生きて出て来れたものは１人もいない。つまり、城の扉は内からも外からも閉ざされていたのである。しかしランスロが城の騎士に打ち勝った時点ですでに魔法の力は弱まり，閉じられた場所は開かれた場所へと変貌する。アルチュール王はこのとき初めて城に入ることができ，虜となっていた円卓の騎士たちは解放される。最後にランスロが城のすべての魔法を消失させたとき，あらゆる扉がすべての人に開かれる。悪の魔法に支配されていた城は開かれ，人間の世界と統合されたのだ。

またもう１つの意味は，ランスロの人間世界への復帰である。前述した通り，Douloureuse Garde の冒険は，ランスロが騎士になって初めて１人で征服した冒険である。別の言い方をすれば，これは叙任されたばかりの騎士の通過儀式的な冒険であり，これに打ち勝って初めて一人前の騎士と認められる。それはまた，異界の者であったランスロが，人間世界に受け入れられるためにやり遂げなくてはならない冒険でもあった。

第２の意味を解くうえで重要なのが，テキストに表れる色の役割である。ランスロが初めて宮廷に現れたとき，アルチュール王を始め居並ぶ騎士たちは，そのいで立ちに驚いた。バン王の息子ランスロは幼い頃湖の奥方（Dame du Lac）に連れられ，湖の底で育てられた。奥方は18歳になったランスロを人間の世界に返そうと，アルチュール王の宮廷に出掛け，騎士に叙任してもらおうと考える。彼女は「白でないものが１つもないように」（*Lancelot* édition A. Micha t. Ⅶ p. 258, Droz）叙任式のためのランスロの武具，服をすべて白で整える。それだけではなく，付き従う従者40人，白馬40頭も白ずくめの装束をまとい，奥方自身も白のいでたちで宮廷に赴くのだ。この白の行列に森の中で遭遇したアーサー王は，「一同が白装束をまとい白馬にまたがっているのをびっくり仰天して」（t. Ⅶ p. 265～266）

見つめる。つまり王を驚かせたのは豪華な行列そのものではなく，白という色だったのである。

白の持つ意味は，*la Queste del Saint Graal* のようにはっきりとテキストに表れているわけではない。*Queste* における白は，黒との対比により，神と悪魔という宗教的な象徴性を帯びている。白は純潔，聖性を意味し，*Queste* の中では，白い武具，白い服は神から送られたものである[1]。このような宗教性は帯びていないとしても，Douloureuse Garde のエピソードにおいても，白が非日常的な色として取り扱われていることは確かであろう。湖の奥方は，白が異界の者の色だということを十分承知していると思われる。それゆえ彼女は，ランスロが身につけるものに「白でないものが1つもないように（前出）望んだのである。人間ではあるけれども，異界に育ったランスロは，白をまとわなくてはならない。逆にいうと，人間社会に戻って初めて，つまり Douloureuse Garde を征服して初めて，ランスロは他の色を身につけることができる。

それを如実に示すのが，ランスロの盾の色である。湖の貴婦人は白装束，白い盾を帯びたままランスロを叙任してくれるよう，アルチュール王に頼んだ。なぜなら，このときはまだランスロは人間となる資格を得ていないからだ。王は奥方の依頼を承知したが，これは宮廷の慣習に反したことだった。というのも，王は新しく叙任した騎士には自らが盾を与えていたからだ。こうしてランスロは，「白の騎士」「白い武具の騎士」として Douloureuse Garde に臨むのである。

騎士になったランスロは，湖の奥方の庇護から独立しなくてはならないが，この自立は，盾を変える過程に表されるように段階的にしか得られない。Douloureuse Garde で最初の戦いを行ったとき，ランスロは白い盾をつけていた。そして戦いの途中で，湖の奥方から3つの盾を遣わされる。これは銀色に朱の筋がそれぞれ1本，2本，3本と入っているもので，首に掛けるや否や自らの力に加えて，1人，2人，3人分の力を得ることができるというものだ。ランスロはこの盾を順々に使って Douloureuse Garde のすべての騎士に勝ち，捕われていたゴーヴァンたちを解放する。

その後落馬して3本線の魔法の盾は壊れてしまう。そこでランスロは赤い盾を調達して，ゴッドセールの馬上試合に incognito で出場し，優勝する。しかし正体を見破られることを恐れてその場を抜け出し，1人 Douloureuse Garde に戻ってその悪い魔力を破ろうとする。このときも incognito の対する配慮から，試合で地の騎士に見られている赤い盾を覆い隠す。そしてランスロは見事城の悪魔を追い出し，ついに Douloureuse Garde の全ての魔法は消え失せたのである。

このエピソードにおいて，ランスロの所属する2つの世界，つまり異界と人間世界を象徴しているのは盾である。ランスロは魔法の盾を使って Douloureuse Garde の騎士に打ち勝つが，それによって本当の勝利が得られた訳ではない。落馬事故で粉々に割れた魔法の盾は，異界の保護が終了したことを意味する。そしてランスロは人間の盾によって，Douloureuse Garde の悪い魔法に終止符を打つことができたのである。

以上簡単に見て来たように，Douloureuse Garde のエピソードに関する限り，白という色，そしてランスロの盾は単なる描写上のアクセサリーではない。description はテキストから象徴的な意味を浮かび上がらせる役を果たしているのだ。ここで別の疑問がでてくる。このようにテキストの意味を解くうえで重要な description は，イマージュにおいても視覚的に再現されているのだろうか。

2．イマージュ

2．1．"Lancelot" の写本

Lancelot の写本はパリの国立図書館およびアルスナル図書館に40ほどが保存されている[2)]。そのうち装飾文字，挿絵が施されているものは28で，パリにある写本の70%にあたる。さらにそのうち，物語の第1部を含むものは14写本である[3)]。すなわち，BN mss. fr. 96, 110, 111, 112, 113, 118, 121, 122, 344, 751, 754, 16999, Ars. mss. fr. 3479, 3481。これらは，挿絵技術が圧倒的に発達した14世紀中頃を境に，2つのグループに分けられる。

(1) 13世紀から14世紀半ばまでの写本	(2) 14世紀末から15世紀までの写本
BN. mss. fr. 110, 344, 751, 16999	BN. mss. fr. 96, 111, 112, 113, 118, 121, 122, Ars. mss. fr. 3479, 3481

この区分は挿絵技術を考慮したものであって，テキスト内容によるものではない。この区分に従って，以下簡単に写本の視覚的表現を検討してみようと思う。

(1)グループの挿絵は，極めて簡素で，素朴な表現にとどまっている。1つの枠の中に複雑な背景が描き込まれていることもなく，人物の後ろにせいぜい簡単な樹や城が加えられている程度である。複雑な場面を描ききれないためか，Douloureuse Garde の騎士との戦いの場面は取り上げられていない。例えば BN. mss. 110, 16999では，ランスロが乙女と出会った場面（ex. BN. ms. fr. 110 fol. 203《図2》）または隠者と出会った場面など，あまりドラマチックとはいえないシーンが選ばれている。ここにその rubrique をいくつか紹介しよう。「いかに1人の白い武具の騎士が馬に乗り，泣いている乙女と出合ったか」(BN. ms. fr. 110 fol. 96-v)，「いかに白い騎士が馬に乗ってある森にさしかかり1人の隠者に出会い話したか」(BN. ms. fr. 110 fol. 201-v)「いかにランスロは乙女に出合ったか」(BN. ms. fr. 16999 fol. 46-v)「戻る途中でいかにランスロが1人の隠者に出合ったか」(BN. ms. fr. 16999 fol. 53-r)。

ここで注目されることは，rubrique に白い武具と書かれているのに，挿絵ではランスロの武具が時には青，時には黄色で描かれている点である。唯一の例外は BN. ms. fr. 110 fol. 201-v で，ここではランスロは白地に朱色の線が3本入った魔法の盾をつけており，テキストの記述と一致している。しかし同じ写本の別のミニアチュールでは，ランスロの武具の色，盾のモチーフは，バラバラに描かれている。このことから，挿絵画家のイマジネーションはテキストによって喚起されるものではないといえそうであ

る。

(1)グループの写本の挿絵は，テキストを忠実に再現するより，むしろ別の役割を果たしているのではないだろうか。多くの挿絵および装飾文字は，物語の章の冒頭に位置し，章の変わり目を示している。挿絵には章の中で起こる出来事の1つが描かれており，このため，絵が，その対象となるテキストの場面から遠く離れて置かれていることもある。すでにこのことからもテキストと挿絵の関係は疎遠だといってよかろう。一方，枠にくくられた2つないし3つのシーンで構成されるミニアチュールは，章よりも大きい区分である部（物語の1部，2部の部）の冒頭などに置かれている。このように，挿絵や装飾文字はテキストの内容よりも，写本の構成により深くかかわっていると考えられる。

これに対し，(2)グループにおいては，装飾は商品としての写本の価値を高める大切な要素であり，テキストの知的な内容を伝える手段ともなっている[4]。挿絵は単にテキストの従属物ではなく，同等，あるいは時としてそれ以上といっても良い位の地位を獲得している。写本収集に熱心だったベリー公ジャン・ド・フランスと，そのひ孫ジャック・ダルマニャックはアルチュール王物語の写本をあまた所有していた。彼らの所有にあったBN ms.fr. 112，113，118，Ars.ms.fr.3479は，1つのカテゴリーにくくることができる。BN. ms. fr. 112はジャック・ダルマニャックが注文した写本で，ジャン・ド・フランスはBN mss. fr. 117-120とArs. ms. fr. 3479を所有していた。特にBN ms. fr. 118とArs. ms. fr. 3479の挿絵は同じ工房でつくられたため，選ばれている場面，表現等が酷似している。これら大貴族の所有にあった写本では，テキストよりも大きいスペース，フォリオの3分の2をまるまる挿絵にあて，物語の中で主要な場面をいくつか表したヴィジュアルな“目次”となっているものが少なくない《図1（ex. BN. ms. fr. 117 fol. 1)》。つまり，“目次”は，読者に物語を視覚的に語っているのである。

大貴族の庇護のもと，挿絵画家は自分の技量を向上させ，複雑な場面を選んで細密な表現を施し，腕の見せ所とするようになった。同時にテキストの description も挿絵の中で忠実に表現されている。BN. ms. fr. 118 fol. 189-v の挿絵では Douloureuse Garde の戦いが描かれている《図 3》。ランスロは白い服を身につけ，白馬にまたがっている。朱の線が 2 本入った魔法の盾をかけており，傍らには湖の奥方が遣わした乙女が，3 本線の魔法の盾と魔法の兜をランスロに渡そうと用意している。また，城門の上には，武装して長い槍を持った馬上の銅の騎士を確認することができる。この銅の騎士は，テキスト（ed. t. VIIp. 329）の描写にも登場する。これを見る限り，テキストの description はおろそかにされていないといえそうである。(2)グループの写本は，(1)グループと比べものにならない程の忠実さで，テキストの description を再現していると考えられる。

2．2．イマジネールな紋章の発達

(2)グループ写本のつくられた時代には，アルチュール王と円卓の騎士の物語は宮廷貴族の間で大ブームを巻き起こした時期でもある。夥しい数の傍系の物語がつくられ，人々はファンとなっている騎士のささいな出来事でも知りたがったのである[5]。アルチュール王の騎士たちの紋章が形成され，騎士たちの簡単な伝記と兜飾りや紋章を集めたカタログが作られるようになったのも，その 1 つの表れであろう（ex. Ars. ms. fr. 4976）。これらを参照すると，ランスロの紋章は銀色に朱色の線が 3 本はいったものが通常流布していた。《図 4》（ex. BN. ms. fr. 1437）ランスロの一族，エクトール，ボオール，リオネルの紋章はランスロの紋章を基本として，例えばエクトールは青の太陽を加える，といったように系列化されている。これに対し，ゴーヴァンおよびその一族も，双頭の鷲のモチーフを共有している。ちなみに，Pastoureau 氏によれば，ランスロの紋章の起源は Douloureuse Garde で使われた魔法の盾だということだ[6]。しかし，テキス

トにはこれに該等するようなことは書かれていない。また，ランスロはしばしばincognitoで赤，黒，白などの盾を使う。では，ランスロが普通持つ盾はどのようなものなのだろうか。テキストでは1度だけ「白地に朱色の線1本」(éd. t. I, p. 245) と語られているが，さらに詳しい記述は見当たらない。これに対し(2)グループの写本では，BN mss. fr. 96, 113-116, 117-120, 112, Ars. mss. fr. 3479, 3481に上記の紋章と一致する盾，つまり白地に朱の3本線が描かれている。テキストでランスロが盾を変えていても，挿絵ではランスロは常に同一のモチーフの盾を使用している。

この点，挿絵画家の意図するところは，テキストと全く正反対となっているといえよう。正体を知られないためのincognitoはイマージュでは無視され，読者が常に登場人物を認識できるように特定の人物に特定のモチーフが与えられているのだ。

テキストとイマージュの関係は，時を経るに従って密接になりながらも，14世紀末にはイマージュはテキストから独立しようとしているように思える。テキストのdescriptionに忠実であろうとしながらも，イマージュは視覚芸術としてテキストとは別の機能を果たし始めてきたのだ。円卓の騎士が宮廷文化に一大ブームを巻き起こし，爛熟するとともに，イマージュは物語を具現化する手段として，視覚的に独自の物語を語りだしたのである。

1） A. Pauphilet : *Etudes sur la Queste del Saint Graal,* Paris, Champion, 1921
2） A. Michaは，*Lancelot*のすべての写本を詳しく検証している。"Romania" LXXXI, 1960, pp. 145-187, LXXXIV, 1963, pp. 28-60, LXXXV, 1964, pp. 478-499
3） *Lancelot*は "Galehout" (Sommer版t. IIIからt. IVの最初155ページまで)，"Charette" (t. IV残り)，"Agravaain" (t. V) の3部から成ると考えられる。Douloureuse Gardeのエピソードは "Galehout" に含まれる。
4） H. toubert : *Forme et fonction de l'enluminure* dans "l'Histoire de l'édition française" t. i, Paris, Promodis 1983

5) C.E. Pickford *L'Evolution du Roman Arthurien en prose vers la fin du Moyen Age* Paris, Nizet, 1959

6) M. Pastoureau *Héraldique Arthurienne et Civilisation Médiévale, Note sur les Armoires de Bohort et de Palamède* dans "Cahier d'Héraldique" pp. 23-30

les œvres consultées

les textes

Lancelot édition A. Micha tome I-IX Droz

Lancelot dou Lac édition E. Kennedy tome I, II, Oxford 1980

La Quêste del Saint Graal édition A. Pauphilet Paris, Champion

les études

G.J. Brault *Early blason. Heraldie terminology in twelfth and thirteenth centuries* Oxford 1972

R. Dragonetti *la Vie de la Lettre au Moyen Age* Paris, seuil 1980

R.S. Loomis *Arthurian Legende in the Medieval Art* New York, 1938

F. Lot *Etudes sur la "Lancelot" en prose* Paris, Champion, 1918

A. Pauphilet *Etudes sur la Quête del Saint Graal* Paris, Champion, 1921

C.E. Pickford *l'Evolution du Roman Arthurien en prose vers la fin du Moyen Age* Paris, Nizet, 1959

E. Vinaver *A la Recherche d'une Poétique Médiévale* Paris, Nizet, 1970

les articles

A. Micha *les Manuscrits du "Lancelot" en prose* dans "Romania" LXXI, 1960, pp. 145-187, LXXXIV, 1963, pp. 28-60, LXXXV, 1964 pp. 478-499

M. Pastoureau *Armoiries et devises des chevaliers de la Table Ronde, Etude sur l'imagination emblématique à la Fin du Moyen age* dans "Gwechall" tome III, 1980, pp. 29-127

M. Pastoureau *Héraldique Arthurienne et Civilisation Médiévale, Notes sur les Armoiries de Bohort et de Palamède* dans "Cahier d'Héraldique" pp. 23-30

H. Toubert *Forme et Fonction de l'enluminure* dans *Histoire de l'Edition Française* tome I Promodis 1983, pp. 87-130

M.A. et R.H. Rouse *la Naissance des Index* ibid., pp. 77-86

les manuscrits consultés

Paris, B.N., fond français,
ms. 96-Lancelot en prose, XVe s.
ms. 110-Lancelot en prose, fin du XIIIe s.
ms. 111-Lancelot en prose, XVe s.
ms. 112-Lancelot en prose, 1470
ms. 114-Lancelot en prose, fin du XVe s.
ms. 118-Lancelot en prose, fin du XIVe s.
ms. 121-Lancelot en prose, XVe s.
ms. 122-Lancelot en prose, 1344
ms. 123-Lancelot en prose, XIVe s.
ms. 333-Lancelot en prose, XIVe s.
ms. 343-La Quêste del Saint Graal, XIVe s.
ms. 344-Lancelot en prose, milieu du XIIIe s.
ms. 358-Guiron le Courtois
ms. 754-Lancelot en prose, XIIIe s.
ms. 1422-Lancelot en prose, XIIIe s.
ms. 12580-Lancelot en prose, XIIIe s.
ms. 12573-Lancelot en prose, fin du XIIIe s.
ms. 16998-Lancelot en prose, XIVe s.
ms. 16999-Lancelot en prose, fin du XIVe s.
ms. 12597-Livre des blasons,
ms. 1437-Livre des blasons

Paris, Bibl. de l'Arsenal, fond français
ms. 3479-Lancelot en prose, début du XVe s.
ms. 3481-Lancelot en prose, milieu du XIVe s.
ms. 4976-Livre des blasons (les armoiries et les portraits des chevaliers de la Tble Ronde)
ms. 5024-Livre des blasons

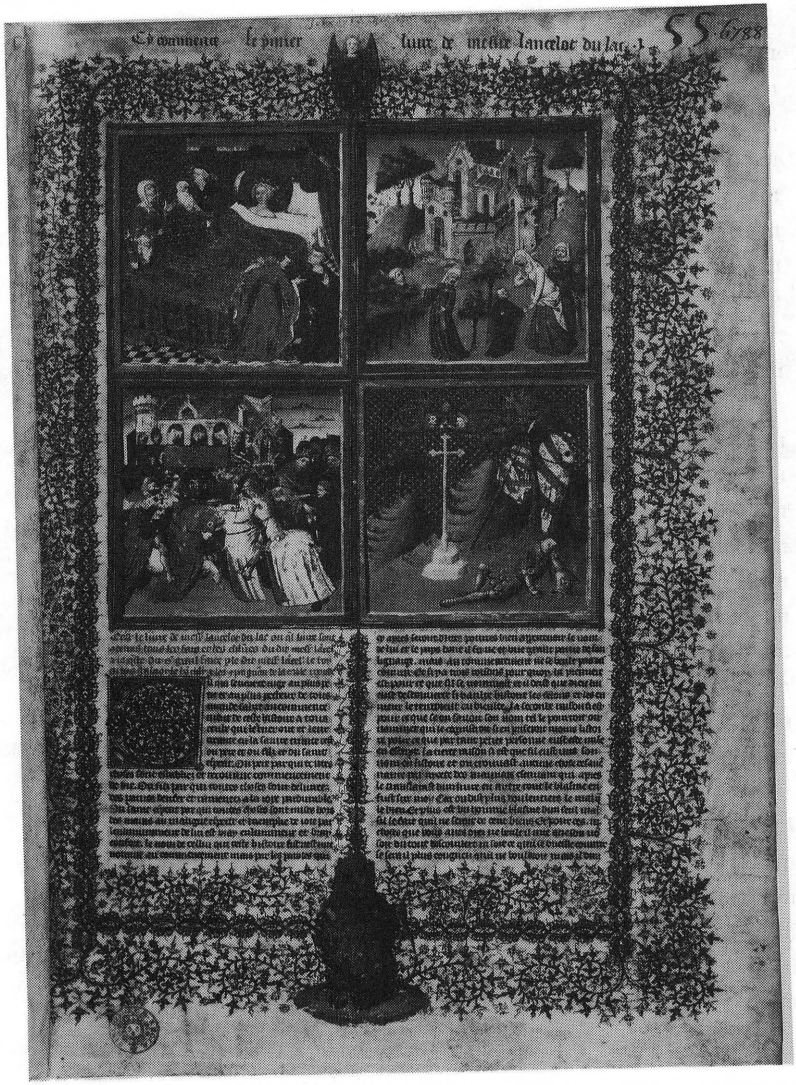

図 1

図 2

図 3

図 4